

学園だより

3

2015 March

Vol.183

I 卷頭言

弘前大学長 佐藤 敬

II 特集

卒業・修了・退職にあたって
卒業生・修了生
教職員

III 新任教員自己紹介

IV 研究室紹介

V けいじばんコーナー

VI 編集後記





未来に向けて 弘前大学を退職、卒業される皆さんへ

弘前大学長
佐藤 敬

今年もまた春の到来とともに、別れと出会いの時期を迎えることになりました。平成26年度末で弘前大学を退職もしくは卒業される皆さんに、先ずもってお礼を申し上げます。退職される教職員の方々には、永年にわたって、直接・間接にお世話になりましたことを感謝し、卒業される学生の皆さんには、弘前大学における教育・研究活動において主体的な役割を果たしていただいたことに感謝します。皆さん、大変ありがとうございました。

弘前大学における皆さんの役割があつてこそ、本学の歴史と未来があります。特に本学で永年勤め上げられた教職員の方々には、その間に困難なことも数多く経験されたかと思います。また、学生の皆さんは楽しい学生生活を過ごしたものと信じていますが、時には忍耐や努力を強いられる場面もあつたのではと推察します。それにもかかわらず、あるいはそれが故に、弘前大学で過ごした日々が皆さんにとってかけがえのない記憶として、いつまでもとどまるものと確信しています。

弘前大学は新制大学として新しい出発を遂げてから昨年で65周年を経りましたが、間違いなく、この歴史の中で皆さんお

一人ひとりの役割は欠くべからざるものでした。旧制弘前高等学校や青森師範学校、青森医学専門学校などを母体に新制弘前大学として出発した際の姿が、その後の学問の展開、地域連携や人材育成の需要などにより、この65年間に変貌してきたのは必然であり、退職される教職員の方々には、その変遷の歴史の一端を担って来られました。また、卒業生の皆さんにとっては、本学の歴史を明確に意識することは難しい面もあるかとは思いますが、現在の教育・研究の在り方は、これまでの歴史を抜きにして語ることはできません。さらに、平成27年度は、人文学部と農学生命科学部はそれぞれ創立50周年、60周年にあたり、弘前大学にとって節目の年でもあります。節目とは言っても、長い歴史の中の一コマに過ぎませんが、それを機に本学の来歴を思い、将来を考えることが重要です。

大学の役割は、高度の教育・研究を通して社会に貢献することとされており、皆さんが社会のリーダーとしての役割を力強く果たして下さることによって、弘前大学の社会的使命も全うされることになるのは間違いありません。そのような基本に基づいて、現在、弘前大学にお





いては学部・学科の再編が進められており、その成果は社会の、特に地域社会の活性化に貢献するものになっていくことが重要です。また、その成果がいかなるものになるかは、長い眼で見ていくことも必要です。そんな中で、人材の育成こそが大学における教育・研究の成果の大きな役割として問われるものと認識しています。大学人としての私たち自身の役割を軽視するのではなく、教育・研究の成果をしっかり見据えるという視点で考えても、弘前大学卒業生の皆さんには、これまで以上に長い今後の人生の中で、さらに自らを磨いて社会に貢献することを目指していただくようお願いしています。卒業される皆さんの多くとは、引き続き連携を図ることが簡単ではありませんが、大学の社会的使命を意識した精神的連帯は今後も引き続き保つことができると願っています。

高齢化が進行しつつある我が国において、もう一つの大きな課題は健康です。特に、退職される教職員の皆さんにおかれましては、健康にも十分留意されて、引き続き有意義な日々を送られるよう願っています。私たちの社会はいつもさまざまな課題を抱えてきたことに間違いな

いものの、昨今の状況は未曾有の課題を包含していると思います。そして、我が国は課題先進国とも言われ、中でも、青森県は課題先進県とも言われています。特に人口減少、少子高齢化は深刻な課題であり、それに伴って最近では消滅自治体などという言葉さえ聞くようになりました。その他にも、地球規模でのさまざまな課題がありますが、人類の歴史は常に未曾有の課題を抱えながら展開してきたことに間違いなく、しかも、私たちの先人があらゆることを首尾よく解決してきたわけでもないのではと想像します。現在の我が国においては、若年人口が減少していると言っても、卒業生の皆さんのような有為の若者がまだまだたくさん居られます。また、日本人の活動的平均寿命は世界をリードしており、多くの高齢者は大変元気です。基本的には、私たち一人ひとりがひたむきに生き、そんな社会を若者や現役世代がリードしていくことで課題を克服していく以外にありません。特に、社会に巣立っていく卒業生の皆さんには、社会に貢献する意志を明確に持って活躍して下さるようお願いいたします。

さて、今年度末をもって、皆さんは弘前大学の同窓メンバー

になられますので、例え離れていても、弘前大学の当事者であって頂きたいと思います。あるいは、本学の強力な応援団であって下さるよう熱望しています。そのためには、いつまでもお元気に過ごされ、いつまでも弘前大学の応援団であり続けて下さい。皆さんが生活し、学んだ弘前の地は歴史と文化の香りが高く、豊かな自然にも恵まれ、そして地域の人々は弘前大学に親しみを持って期待を寄せておられます。私自身もこの弘前の地で学び、仕事を続けて来られたことを大きな幸せと受け止め、地域からのご支援にいつも感謝しています。弘前を去られる皆さんにも、この地で学び勤務されたことをいつまでも記憶して下さることと信じています。そして、機会を見つけて再び弘前大学を訪れて下さるようお願い、また、いつの日か再びこの地で生活して下さるようになることを夢想してもいます。

最後になりますが、退職される教職員と卒業生の皆さんの今後のご健勝とご多幸を、重ねて、お祈り申し上げますとともに、心からの感謝を申し上げます。大変ありがとうございました。



人文学部



人間文化課程

吉田里帆

大学生活を振り返って

4年間の大学生活を振り返ってみると大変充実し素晴らしいものだと感じています。

1年生の時に受けた講義でインドについて学ぶことに新鮮さを感じ、南アジアゼミで主にインドやスリランカの自然環境問題について研究を重ねました。3週間ほどインドに滞在したゼミ旅行では、現地の人々との交流、タージ・マハルの見学、ヒマラヤ山脈の標高2,000mに位置するマナーリーという場所の観光など濃い時間を過ごしました。特にマナーリーの観光は都市部との生活の違いを観察することができ、インドという国の中の多様さを実感できたのでとても貴重な体験だったと思います。

サークル活動で行っていたアカベラも私の中で大切な存在でした。バンドメンバーと力を合わせて一つの音楽を作っていく、その過程はとても難しいものですが、その分出来上がった時の達成感や嬉しさは大きく、やりがいのある活動だったと思います。

このように大学生活を謳歌できたのも、周りの人たちの支えがあったからです。ご指導くださった先生方や先輩方、支えてくれた友人・後輩たちへの感謝の気持ちを忘れずにいたいと思います。本当にありがとうございました。



現代社会課程

奈良美智子

大学生活を振り返って

弘前大学での学生生活は、言葉では言い表せないほど充実し、そして周りの人たちへの感謝を感じた5年間でした。オーケストラでの演奏、国際政治ゼミでの勉強や研究、ニュージーランドへの交換留学、インターンシップなど思い出したらきりがなくいろいろなことがありました。決して楽しいことばかりではなく、思い通りにいかず何度も悩んだこともありましたが、その度に支えてくれたのが、オーケストラの仲間、ゼミの友人、指導教員のカーペンター先生をはじめとする先生方、そして何より家族の存在でした。卒業論文の執筆の際も、ゼミ生同士のピアレビューやディスカッション、カーペンター先生からの厳しくも温かいご指導を通して学問の奥深さを改めて感じました。論文を執筆する中で一番学んだことは「人生は一生勉強」ということです。世の中はまだ自分の知らないことで溢れかえっていることを知り、卒業後も心がけ次第で勉強は続けられると思ったので、これからそれを実践して行きたいと思うようになりました。最後に、今まで支えてくださった周りの人たちに感謝の言葉を伝え、終わりにしたいと思います。本当にありがとうございました。

後輩たちへ

私は大学生活で、かけがえのない友人と様々なことを経験しました。一緒にスポーツをしたり、温泉旅行へ行ったりと、楽しい思い出は数えきれません。特に去年は就職活動の年ということで、個人的には辛い経験をしたのですが、やはりその時支えてくれたのも友人でした。この4年間は、そのような支えもあり、本当に人間的に成長できた4年間だと実感しています。私は今年から、新社会人となりますが、これからもさらに自分が成長できるように日々精進したいと考えています。

後輩たちに伝えたいことは、友人を大切にしたいということです。大学生活では、後輩たちにも様々な出会いがあり、またこれから辛いことや楽しいことを共に経験していくことと思います。私は学生生活を振り返れば、友人には支えてもらってばかりな気がしますが、後輩たちにはぜひ友人が悩んでいる時には積極的に手を差し伸べてやって欲しいです。もちろん自分が悩んでいる時には、友人を気軽に頼りましょう。私が言いたいのは、そのようにお互いに助け合える友人を大切にしたいということです。最後になりますが、残された学生生活に悔いを残さないように頑張ってください。

経済経営課程

鹿内大成



学校教育教員養成課程

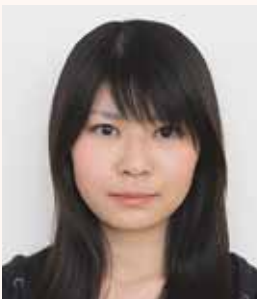
木村 萌

多くの出会い、そして支え

大学での4年間は、私にとってかけがえのない日々となりました。初めての一人暮らし、新たな生活が始まることにドキドキしながら入学した日からはや4年。ここ弘前に来て、多くの人々との出会いがありました。学科の友達や先生との出会い、サークルの仲間たちとの出会い、多くの出会いが私を支えてくれました。

この4年間は、決して楽しいことばかりあったわけではありません。実習や授業で上手くいかないことがあって悩んだり、サークルの運営で苦労したり、つらい経験もたくさんありました。しかし、こんな時でもそばにいてくれたのが、学科やサークルの仲間たちでした。私が毎日笑顔でいたのも、この4年間を楽しく過ごせたのも、多くの仲間たちのおかげです。

大学生の本業はもちろん勉強です。しかし、せっかく大学でできたつながりを、この出会いを無駄にするのはもったいないことです。私自身、仲間たちと過ごす時間を大切にすることで、充実した大学生活を送ることができました。これまで私を支えてくれた仲間たちに感謝の気持ちを送りたいです。みんなありがとう！！



学校教育教員養成課程

町田 朱莉

震災時の入学を経験して

4年前の3月11日、地元新潟から弘前へ向かう途中で東日本大震災に遭いました。停電ではほぼ何も見えない暗がりの中で、弘前大学の先輩方のアドバイスの元、炊き出しのおにぎりを片手にアパートを決めたことが昨日のこのように思い出されます。

『大学生活は人生の夏休み』とよく言われますが、思い返してみると毎日の講義や慣れない一人暮らし、教育実習、アルバイト、サークル活動等で毎日が忙しかったです。特に教育実習では、今までの教わるという立場から一転、教えるという立場になることでこれまでとは違った目線から学校を見つめ直すことができたと感じます。また、カミツキカメの解剖や、小・中・高等学校に出かけての実験教室といったユニークな講義、四季折々のゼミでの行事など毎日が新鮮でとても充実していたと思います。こうした学生生活を送ることができたのも、一生懸命に支えてくれた家族、ゼミから卒業論文まで熱心に御指導くださった理科教育講座をはじめとした諸先生方、同じ目標に向かった全ての人のおかげだと思っています。多くの人に支えられ無事に卒業できたことへの感謝を忘れずに、春からは教師として頑張っていきます。



生涯教育課程

葛西 輔

「4年間で得たもの」

弘前大学で過ごした4年間は、本当に充実したかけがえのない時間でした。今、まさに4年間の思い出の数々が走馬灯のように頭の中を駆け巡っています。

入学当初、特にこれといった目標もなかった私は大学生活の中で様々なことにチャレンジすることを心掛けました。中でも教育実習と部活動を通じて、一回りも二回りも大きく成長できたのではないかと感じています。仲間と協力して授業を行う3年時の教育実習では、グループでの作業を思うように進めることができずに悩んでいた際、「1人でやるのは誰でもできるけど、みんなで作るから難しい。だけど、それが社会でいう仕事なんじゃない？」という友人の言葉にはっとさせられたことを、今でも鮮明に覚えています。周囲と協働しながら物事を進めることの大切さに気付かされました。また、高校時代から続けてきたハンドボールからは「考える」ことの大切さを学びました。ハンドボール部は指導者がおらず、練習内容の調整や部の運営もすべて学生が行っています。その環境の中で、今の自分には何が足りないのか、また足りない部分を補うためにはどのような練習が必要なのかをひたすらに考え、練習に励んできました。主体的に考え、行動する力は今後、様々な場面で生かしていけると考えています。

最後に、私の充実した4年間は多くの方々を支えを抜きにはあり得ませんでした。先生方や仲間、そして両親に心より感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

医学部



医学科

小川 哲也

母 校

3月末をもって6年間に在籍した弘前大学を卒業させていただくことになった。教員の皆様はもとよりお世話になったすべての人に厚く御礼申し上げます。

私の顔をご存知の方もいるかもしれない。ここ2年ほど毎日パソコン室に現れ、予備校の授業を聴講することを日課としてきた。最後の試験に向けて努力を続けたのは、生来の怠け者で強制されないとなかなか努力できない性格であること、そして何より合格できるか不安であったことが大きい。朝早くから夜遅くまで学生に開放されているパソコン室は、私にとって最高の環境であった。考えてみればパソコン室の他に図書室にも自習スペースが用意され、時習館・地下自習室と弘前大学は様々な形で学生の勉強する場を提供してくれている。多くの大学が自習室を用意しているとはいえ、ここまで手厚く学生のニーズを満たそうとしているのは弘前大学くらいではないかと思う。

快適に勉強できる環境に甘えてきたのだが、偶に休みの日に学校に来ると掃除の方が私たち学生の投げ散らかしたゴミをきれいにしてくれているのを見ることができる。病院内と同様、敢えて人の少ない休日に清掃していただけるのは感謝以外に言葉が見つからない。よく「医療は医師だけでは成立しない。多くの関係者と力を合わせて初めて成り立つものだ」という。大学は医療の現場そのものではないが、多くの人の努力によって快適な環境が成立している。私たちはこのように快適な環境づくりに一役買ってくれている人々のことを意識するべきであろう。

振り返ってみると様々な方に支えられ励まされてここまでやって来れたのだと気づいた。弘前大学で学ぶことができ本当によかったと思う。今後は応援してくれる皆さんのためにも努力を続け、母校の発展に少しでも貢献できればと思う。

弘前大学を卒業するにあたって

1年生の頃は長いと思っていた六年間も気づいてみればもうすぐ終わりです。過ぎてみると驚くほどあっという間でした。それだけこの弘前で密度の濃い時間を過ごしていたのだと思います。さて、医学部は2年生から専門課程が始まり、試験も大変になりますが、そんな時に頼りになるのが友達でした。これは国家試験の時もそうでしたが、「みんなと一緒に合格してやるんだ」という気持ちが医学部の試験を乗り越える上では本当に大事だと思います。また、学生時代の友人は社会人と違って立場など関係なく気兼ねなく付き合える立場なので、学生時代だけでなく一生の友達となるように大切にしていって欲しいと思います。また、自分の生活の中では部活動も割合が多かったですが、良い先輩、後輩に恵まれ本当に幸せでした。最近は部活に入る人が少なくなったと聞きますが、是非入りましょう！部活では楽しいことだけでなく辛いことだってあるとは思いますが、生きていく上で良い糧となると思います。最後に、六年間お世話になった先生方、先輩方、後輩の皆さん、本当にありがとうございました。弘前で学び経験したことを活かして、4月から医師として精進していきたいと思っています。

医学科

上田 健太郎

大学生活を振り返って

弘前大学に入学してから早6年。弘前の満開の桜を見るたびに、こんな素敵な場所で生活し自分の好きなことを学ぶことのできる私は幸せ者だなと感じていました。「大学生活は本当にあっという間だよ」と母から入学前に教えられていましたが、まさかこんなに早く過ぎるとは思いませんでした。初めての土地、初めての一人暮らし、新しい環境に唯々圧倒され、右も左も分からなかった私が無事こうして大学生活を送り卒業を迎えることができるのも、本当にたくさんの方々のおかげだと実感しています。

後輩の皆さんには、人との繋がりを大切に、思う存分学生生活を楽しんでもらいたいと思います。勉強はもちろん、それ以外の多くのことを学べるのが大学の特徴であるように思います。一緒に学業や遊びに切磋琢磨した同期達、支えてくださった先生方、部活の先輩方や後輩たちは、私が6年間で得た一番大切なものです。その人達から学んだことが、現在の私の一部となり、私の中で生きています。辛かったこと、悲しかったこと、楽しかったこと、何一つとして無駄だったものはありません。お世話になった方々、本当にありがとうございました。

医学科

川口 優花



理学療法学専攻

薛 峻 杰

弘前大学での思い出

振り返れば、大学生活に大きな期待を寄せて本町キャンパスの正門に立ったことはもう4年前のことでした。決まった教室に自分の机があるわけでもなく、外国人留学生として言語バリアなどもあり、大学生活に慣れるまでには、ほんの少しだけ時間がかかりました。

しかし、卒業の時を迎えた今では、大学生活のそんな側面は非常に魅力的であるように思われます。自分の居場所を自分で見つけようとするうちに、どれほどたくさんの人たちにめぐり逢うことができたか、そしてその出逢いが自分自身にとってどれほどの糧になったか。大学での生活は自分自身の人生にとって欠くことのできない1ページであったということに、疑いの余地はありません。

理学療法学専攻で日々先生や先輩方のご指導や指摘からさまざまなことを学ぶことができました。また、私は「弓道部」に所属しました。4年間の活動で、メンバーと苦楽を共にして、学生生活最後まで思い出を作ることができました。

最後に、弘前大学で学んだことを誇りに思い、ここで受けた恵みをより広く社会へと還元していく責任を強く自覚し、そしてひいては世界のために大きく貢献できる人間になることを目指して、今後とも精進してまいります。



保健学専攻

大 森 俊 輔

大学院を終えて

日中は病院で理学療法士として勤務し、夜間は大学院の授業やゼミ活動など大学院の2年間はあっという間に過ぎていきました。1年目は授業と研究計画、2年目は研究データの収集および解析、学会での発表と多忙な毎日でした。そもそも大学を卒業した当初は、大学院に行くことはないと思っていました。大学院のイメージはまさに「研究」というものであり、勉強があまり得意ではなかった私は臨床経験をどんどん蓄積していきたいと考えていたからです。しかし、いざ臨床に出ると学生時代とは違い患者さんを担当する責任が生じてきます。どうすればもっとこの患者さんを良くすることができるか、この後どのような予後をとどっていくのだろうかという疑問が山のように出てきました。その都度、自分で文献を調べたり、先輩に助言を頂いたりしました。そのうち自分自身で調べてみたいと思いつき大学院に入りました。大学院を終えてもまだまだ疑問は沢山あります。こうして考えると日々勉強の積み重ねだと常々思います。ただ、大学院に行ったことにより自分の疑問の解決手段が明確になったように思います。今後もこの経験を活かし臨床だけでなく、研究も続けていきたいと思っています。

大学院生活を振り返って

全国の作業療法士数は、私が免許を取得した2008年には42,354名であったのが2010年には53,080名となり、1年に約5,000人ずつ増えている状況です。私が大学院に入学したのは臨床経験6年目の時ですが、その理由は元々研究活動に興味があったということと、毎年後輩が増える状況の中で自分の武器を持ちたいと思ったためです。

実際に臨床業務と大学院生活を両立して思ったことは、自分が思っていた以上にこの二つの仕事に相乗効果があったということです。研究を通して臨床に影響があった部分としては、研究を実施する際に読んだ先行研究の中には臨床にすぐ活かせるものがあり、臨床の幅を広げられたことや、既存の知識をより深い知識へと進化できたことが挙げられます。また、同じく臨床で働きながら大学院にも通う同級生を見て刺激を受け、仕事に対する意欲を入学以前より強く持つことができました。

免許取得者数が50,000人を超え、様々な方面でご活躍されている作業療法士がいる中で、大学院生活を通して、自分自身の進む方向を考えるための選択肢を増やすことができました。今後もこの経験を活かし、日々努力してまいりたいと思っています。ありがとうございました。



保健学専攻

村 上 正 和

理工学部



電子情報工学科

田邊 真輝

大学生活を振り返って

私が弘前大学に入学してから4年が経ちました。今振り返ってみると充実した4年間だったと思います。「今まで球技ばかりやってきたので、球技以外で体を動かしたい」という理由だけでワンダーフォーゲル部へ入部しました。最初の頃は、重い荷物を背負って登山することが好きではなかったと記憶しています。豪雨の中歩くこともあり、何度も心が折れそうになりました。それでも続けていくうちに山の魅力に惹きつけられ、夏は毎週のように登山をするほど好きになりました。

また、麻雀組織体という弘前大学の麻雀サークルでも活動し、いろいろな世代やいろいろな価値観を持つ人と接したことにより、私の人格に少なからず影響を与えてくれました。

学業面では、わからないところは先輩や同期に聞き、納得するまで考え続けました。その結果、全体的に良い成績を修めることができたと思います。

最後に、研究室で指導してくださった丹波先生、基礎ゼミナールで指導してくださった成田先生、ひろだい白神レーダーでお世話になった児玉先生、関わった方々、今までありがとうございました。これから社会人になり、辛いことや困難なことなどもあると思いますが、逃げ出さずに頑張っていきたいと思います。

卒業にあたって

初めて親元を離れる不安と、新たなスタートに期待を膨らませて入学した日から、もう4年が経とうとしています。卒業を待つ今、まさにあつという間だったように感じます。弘前大学で過ごした4年間、私は多くのことを学び、経験しました。自分の未熟さを知った一人暮らしの日々、友人と励まし合いながら頑張った試験勉強、地域の人とのつながりを実感できたサークル活動、振り返るとたくさんのことを思い出します。楽しい事ばかりではなく、辛い事や、後悔する事もありましたが、今の私があるのは、両親、先生、先輩、後輩、友人の支えがあったからです。皆さんの支えがあったからこそ、苦しい事も乗り越えることができ、私自身大きく成長できたと思います。改めて、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。卒業後は、新たに大学院での生活が始まりますが、この感謝の気持ちを忘れずに、目指すべき目標に向かって努力し続けたいと思います。最後に、おこがましいですが、後輩の皆さんにメッセージです。大学4年間はもとより、最後の1年間は特に短いです。今という貴重な時間を大切に、大学生活を充実したものにしてください！

知能機械工学科

田名部 真梨子

「大学生」という価値

私は高専から編入という形で弘前大学に入学した。当時住んでいた街が東日本大震災の被害を受け被災地となったことから地震学を学びたいと思い、編入を決意した。しかし、学校に時間を縛られて生活していた自分には大学の時間は余裕がありすぎて怠けてしまうことが多かった。

大学で過ごす時間は人生の中でも非常に重要な時間だと思う。大学生は社会人ではないが子供でもない。この曖昧さがいろんなことを可能にしてくれる。人として大きくなれるチャンスがそこかしこに転がっている。あとはチャレンジできるかその人次第。たとえ失敗したとしてもそこから貴重な経験値を得られる。そのときはマイナスでも後々プラスになることも多々あるだろう。言いたいことは、とりあえずチャレンジあるのみ！である。何事にも挑戦し続けるチャレンジ精神を養ってほしい。

この期間限定の「大学生ブランド」。この強力なブランド力を活かさない手はない。家でまったり過ごすのもいいが、多くの可能性を秘めている外界に出て人間として成長するのはもっと素晴らしいものである。

以上の言葉を、過去の自分と、同じ過ちを繰り返して欲しくない在校生に送る。

理工学専攻

加藤 爽



生物学科
城 倉 圭

感 謝

私の弘前大学で過ごした4年間はたくさんの人たちに支えられた4年間でした。私は、1年間の浪人を経て、この弘前大学に入学しました。最初は不安がありましたが、学科の仲間や、サークルの仲間と出会い、大学生活が有意義なものになっていきました。

私は弘前大学フィルハーモニー管弦楽団の団員でした。私は3年生の時、コンサートマスターを1年間務めました。仲間と困難を乗り越え、先輩、後輩、同期に何度も何度も支えられ、140人の団員と共に一つの音楽をつくり上げました。この1年間は、私を大きく成長させてくれた1年でした。

私にサイエンスの面白さを教えてくださったのは、学科の先生方でした。もともと、机の上で行う勉強が嫌だった私は、公開臨海実習や学会などにも積極的に参加し、自分の肌で感じ、多くの先生方や友人と出会うことができました。これも、やはり、私の指導教員であった西野先生のおかげだと思います。

私の弘前大学での4年間は、たくさんの人たちに支えられた4年間から、たくさんの人たちに感謝する4年間に変わりました。来年から私は筑波大学の大学院に進学します。これからも感謝する気持ちは忘れません。

大学生活を振り返って

弘前大学での4年を振り返ると、日々の講義や研究活動、就職活動など様々なことがありましたが、私が最も力を入れて取り組んだのは、やはりサークル活動だと思います。私は津軽三味線サークルに所属していました。中学生の時に初めて三味線に触れた時からいつか本格的に弾きたいと思っており、弘前大学に入学して三味線サークルがあることを知り、迷わず入部することにしました。先輩方から曲を教わり、人前で演奏できるようにとにかく懸命に練習しました。2年生の後期からはサークル長を任せられ、サークル全体をまとめていきました。うまくいかないことも多々あり、落ち込むこともありましたが、同期のメンバーや先輩後輩が支えてくれて無事に役割を果たすことが出来ました。サークル活動を通して、目標に向かって共に歩む仲間の存在の大切さを実感しました。

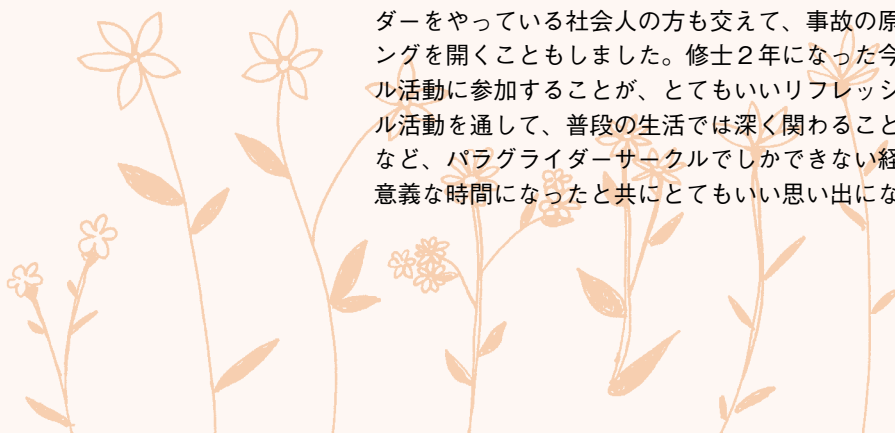
これから新社会人としての第一歩を踏み出すこととなります。地元を離れ、慣れない地での生活は不安なこともありますが、大学生活で得た経験を活かし、新たに会おうであろう仲間と切磋琢磨していきたいと思っています。最後になりますが、家族や先生方、友人をはじめ、この4年間私を支援してくださったすべての方々に感謝いたします。

地域環境工学科
福 士 直 文

学生生活の思い出

私の学生生活の一番の思い出は、サークル活動です。私は、パラグライダーサークルに所属しています。夏休み春休みなどの長期休暇には、複数の大学と合同合宿に参加したり、日本各地に飛びに行ったりしていました。中でも一番思い出に残っているのは、鳥取砂丘での合同合宿です。約1週間に渡る合宿で、全国の学生と共にパラグライダーをやり、懇親会も大いに盛り上がり、とてもいい思い出になりました。また、学部時代3年生の時はサークル運営にも携わり、活動の企画運営や後輩指導に力を注いでいました。事故が起きてしまった時には、パラグライダーのインストラクターさんや一緒にパラグライダーをやっている社会人の方も交えて、事故の原因究明や今後の方針についてのミーティングを開くこともしました。修士2年になった今でも、研究の合間に時間を作り、サークル活動に参加することが、とてもいいリフレッシュになっています。大学6年間のサークル活動を通して、普段の生活では深く関わる事が無い人達との交流や日本各地への遠征など、パラグライダーサークルでしかできない経験をたくさん積むことができ、とても有意義な時間になったと共にとてもいい思い出になりました。

農学生命科学専攻
小 山 昂 志



人文学部



人文学部 教授
諸岡 道比古

退職にあたって思うこと

満四歳になるまで口がきけず、名前が書けるどころか、ひらがな一字知らずに小学校へ入学し、学舎での生活を送り始め、かたちの上では大学院博士課程単位取得退学。その後、黒板の前で回れ右をし、ノートを読み上げ（Vorlesung）、徒に日数を重ね、今日に到りました。普通は二十代で修了する大学院を、五十五六歳になってやっと修了できたかな、と思い、六十に手がかかってから少しずつ問題がつかめ、なすべきことを見出す、というあまりにも遅い歩み。そんな人間に弘前大学は寛大にも職を与えてくれ、学生から見れば、ただ先に生まれただけの先生ではあるが、昭和61年8月教養部倫理学担当として着任し、改組により平成9年10月から人文学部で宗教学を担当。28年あまりにわたって、弘前大学で過ごさせて頂きました。その間、自分の好きなことをして遊ばせて貰い、退職後も、大学図書館で遊ばせて貰おうと都合の良いことを考えております。このように考えることができるのも、弘前大学に集う学生の皆さんや教職員の方々のおかげだと思っております。少子高齢社会の影響などにより、弘前大学は改革を迫られていますが、大学としての使命を果たし、さらに発展することを期待し、応援していききたいと思います。本当に長い間、有難うございました。



人文学部 教授
植木 久行

充実した、楽しき日々

私が弘前大学人文学部に助教として着任したのは、1983年、33歳の時であった。この年は、人文学科の大改組に伴い、教員が多く採用された。当時、大学院を出て非常勤講師をしており、奨学金返還猶予期間5年間で終了する時期にも当たっていたため、この採用は私にとって二重の喜びであった。

人文学科東洋文化コースで中国文学を担当し、1988年以降、大学院でも授業を行い、近年、学部では中国文芸、大学院では中国言語文化論等の授業を担当している。この間、良き学生諸君に恵まれ、楽しく授業できた。他方では、余裕ある研究時間の中で、『唐詩歳時記』、『唐詩の風景』、『唐詩物語一名詩誕生の虚と実と一』、『詩人たちの生と死—唐詩人伝叢考—』、共著としては『漢詩の事典』、『杜牧詩選』などを刊行し、ほどなく編著『中国詩跡事典—漢詩の歌枕』が出る。

かく充実した思いで定年を迎えられるのは、幸せである。長年、お世話になった弘前大学にお礼申し上げる。



人文学部 教授
Victor Carpenter

「老師は教壇で死ぬことなく、ただ寂しく去っていただけだ」

1983年の春、弘前大学に赴任した私は33歳だった。米国ミシガン州カラマズー市の高校を卒業し、1967年に近くの州立大学に入った。それから12年の間、3つの大陸の8つの大学で学んだ。放浪生活をいつまで続けるのが親戚中の話題だった。父親は「あいつは将来何になるのか」と親戚から聞かれると、決まって「老人」と答えた。いま考えても、32年もの間弘大にいることは想像できない青年であった。

ところで、白河以北で講師以上の外国人を採用（定員内）したのは弘大教養部が初めてだと思う。それゆえの「危険物扱い」だったので、面接は2回も受けた。日本国籍の教員と違い、3年の任期も付けられた。だから3年後にはまた「どこかへ」と思っていた。ただ規則では3年任期だったが、「更新は妨げない」の一文もあって、3年経つと更新することが教授会で決められた。その後は職員組合の働きかけもあり、外国人教員の任期制度はなくなった。

振り返ってみると、弘大ではいい学生やいい同僚に恵まれたので、楽しい思い出が沢山残った。退職後も、「老師は教壇で死ぬことなく、ただ寂しく去っていただけだ」をモットーに、学内を静かに、でもうろろしていたい。声をかけてください！！



教育学部 教授
大島 義晴

青森の自然に感謝！

1980年1月1日付けで弘前大学への転任辞令を受け35年、これまでの人生の半分以上を弘前の地で過ごしてきました。この間、学生諸君はもとより学内・学外共々多くの人との出会いがあり、その思い出話は語り尽くせません。

そんな中、担当する保健体育の授業を含め、青森の自然に接する機会が多く、これが自分の生活の充実感を後押ししてくれたような気がします。青森は四季の移り変わりがハッキリしており、それぞれの季節で自然を楽しみ、かつ厳しさを体験することができました。

私はDog Trainingが趣味で、プライベートの時間は自分自身の運動を兼ね犬と一緒によく近所の山を散策します。家から1時間ほどかけ歩いて入った山では、野ウサギ、テン、ムササビ、そして、お猿さんといろいろな動物に出会うことができ（実は犬が見つけてくれるのですが・・・）、四季折々豊かな植生も堪能できます。

日常生活の中に自然を感じながら、長きに渡りお世話になった弘前大学に感謝し、これからも健脚を維持し、愛犬とともに野山を駆け巡りたいと思っています。今後とも弘前大学関係の皆様が教育・研究に充実した学園生活が送れるよう心より願っております。



医学研究科 教授
木村 博人

定年退職にあたって

私は青森市で生まれ、東北大学歯学部を経て、昭和55年4月、医学部附属病院歯科口腔外科医員として採用され、35年間、弘前大学に勤務しました。平成6年4月、歯科口腔外科学講座教授を拝命し、21年間、学生教育・研究活動と共に県内の歯科口腔外科医療の向上に精一杯働いて来ました。この間、多くの弘大関係者にお世話になりましたこと改めて深く感謝申しますと共に、四季豊かな弘前の地で人生の半分以上を過ごすことが出来て幸運だったと実感しております。

思い出されるのは、国立大学法人化間もない頃に財務委員を仰せつかり、遠藤学長の後ろで各学部・附属施設の予算説明を拝聴するという貴重な経験もさせて頂きました。また、平成11年9月から4年弱、原田病院長の下で病院長補佐を務め、附属病院の改革・改善計画などに取り組みましたが、小泉首相の施政方針演説「米百俵」とは真逆の毎年1～2%の運営交付金削減がこれ程までに地方大学を苦しめるとは想像も付きませんでした。超少子高齢化の進行と逼迫する国家財政の中であって、本学教職員各位には、青森県の文化と経済を牽引する知的頭脳集団として、学長のガバナンスの下、改革・改善の努力を積み重ねて頂きたいと切に願うものです。



保健学研究科 教授
山辺 英彰

退職にあたって

今年度で定年退職となり大変感慨深い。医学部は入れ変わりが激しいためまさか大学で定年を迎えることになるとは夢にも思わなかった。北海道の釧路市出身である。昭和43年に弘前大学の医学部に入学した。実家は曹洞宗の寺であったが、次男坊の気楽さで弘前の女性と結婚したこともありそのまま弘前に居着いてしまった。医学部を卒業してすぐ博士課程に入学し内科学、特に腎臓内科学を専攻し、これが一生の研究テーマとなった。博士号を取得し、1年間地方の病院に勤務した後、大学に帰ってきて助手になり、診療、教育、研究と忙しい日々を送ることになった。47歳の時に教育学部の看護教育学科、その後、医学部保健学科に転任となり今日まで看護師教育、大学病院での診療と2足の草鞋を履き研究を続けることができたのは大変有り難いことであった。上司、同僚、後輩、学生にも恵まれ大学を卒業してから40年間好きな勉強を続けることができたのも弘前大学のおかげと感謝している。弘前大学の益々の発展を願って止まない。

保健学研究科



保健学研究科 教授
對馬 均

駆け抜けて振りかえみれば34年

1981年から弘前大学での教育研究に携わって参りましたが、思い返せば、いつも新しいことにチャレンジし、前を向いて駆け抜けてきた34年でした。

最初の20年間は、弘前大学医療技術短期大学部に新設された理学療法学科に所属しました。3年制の短大でしたが、それまで教育制度上、各種学校でしか行なわれていなかった理学療法士の養成を学校教育法上の「大学教育」として行なうというミッションに、情熱を燃やして取り組みました。做すべき前例も乏しく、すべてゼロから創り出す必要がありました。10年を過ぎた辺りからは4年制教育への転換に向けた取り組みを始めましたが、諸般の事情によりそれが実現するまでには更に10年を要しました。

2000年10月に医学部保健学科となり、2001年から4年制大学としての教育が始まりましたが、短期大学との相違を模索しながらの毎日でした。その後、落ち着く間もなく、直ちに、大学院の設置準備に取り掛かることになり、2005年に大学院修士課程、2年後の2007年には組織的に部局化した大学院保健学研究科博士課程が実現し、保健学科開設から10年で大学院博士課程の完成をみることができました。大学院設置準備には部局長の立場で関わらせていただきましたが、当時の遠藤学長はじめ大学関係各位のご理解とご支援の賜物と、改めて感謝申し上げます。

さて、保健学研究科では念願であった校舎の改修も成り、新しい時代に入りました。「新しい酒は新しい皮袋に盛れ」の喩えにもあるように、新しい土俵の上でのますますの発展を祈念いたします。

理工学研究科



理工学研究科 教授
氏家良博

そうそうのへん 滄桑之變

地質学的事実に基づく四字熟語はめずらしいが、「滄桑之變」（「滄海桑田」、「桑田碧海」も同義語）はその一つである。四世紀の後漢の時代に著わされた「神仙伝」によると、仙女である麻姑は「東の青海原（滄海）が三回桑田になるのを見た。今また海水は清く浅くなっているので、間もなく海は陸になり、山になるであろう」と語ったという。この故事がもとになり、世の移り変わりの激しいさまを「滄桑之變」というようになった。

八世紀、唐の玄宗皇帝に仕えた高官（現在の法務大臣）、顔真卿は書家としても大変著名であった。しかし宰相に嫌われた顔真卿は撫州の知事に左遷されてしまう。知事となった顔真卿は撫州各地を視察し、麻姑が住んでいたという伝説の麻姑山を訪れた。そこで顔真卿は石の中から二枚貝、巻貝の化石を発見し、これこそ「滄桑之變」の証拠と考え、文章を認め石碑に刻ませた。その拓本が「麻姑仙壇記」として現在まで保存されている。化石から地殻変動を推定した顔真卿の化石観は現在に通ずるものであり、非常に高く評価される。この事実を基にさらに推論すると、後漢の時代以前にこの地に住んでいた地元民は顔真卿と同じ化石観を認識しており、その内容を仙女である麻姑の言葉として伝承させ、それが「神仙伝」に書き込まれたのではないだろうか。一般民衆の知恵や知識は今考えられているよりもはるかに広く深かったのではないかと私は考える。

弘前大学を含め日本の大学は明治以来大きく移り変わってきた。弘前大学も昭和24年の発足以来、学部の新設・改組、教養部の新設・廃止等色々変わり、平成28年度にはさらに大きな改革が待っているという。弘前大学の改革が行きつ戻りつの「滄桑之變」ではなく、良い方向へと進む「進化」であることを私は期待している。

私は昭和56年教養部に着任以来34年間にわたり弘前大学で研究教育に携わらせてもらってきた。これまでお世話になった教員、職員並びに学生の皆様に感謝するとともに、弘前大学並びに皆様の今後益々のご発展を祈念して、この文章を閉じる。

「我が母校と47年」



農学生命科学部 教授
工藤 明

母校弘前大学農学生命科学部、その前身である農学部創設より60年、学生時代から今日まで学部60年間の途中で4年（学生時代）+43年（技官、教官そして教員として）お世話になったのです。入学当初（昭和43年4月）のガイダンスで大学正門より農学部まで歩いてくると、ほとんどが木造の建物ばかり、今の人文学部の場所には旧制弘前高校の建物、理工学部のところから憲兵隊司令部、旅団司令部、そして農学部ロータリーの所に立派な建物である師団司令部があり、この建物を外から囲むように新しい4階建ての建物が竣工された直後でした。ガイダンスはこの建物の4階（現在の402講義室）で行われ、机もイスも新品でビニールの覆いがそのままだったことを記憶しています。

学部の4年間は色々なことがありました。全国的な民主化運動と学園紛争、弘前大学でもストライキに突入、本部封鎖、そして昭和44年9月の機動隊導入で教育・研究機能のマヒ等々。今は記憶に残る人も少なくなったかもしれませんが、これも弘前大学の歴史です。

その後民主化が進み、特に農学部では昭和49年に農学部教員選考が「公募制」となり、同年選考方法も従来続いた教授のみの選考より、教授会構成員全員による選考制度となりました。即ち、教授の選考に助手も参加できる体制となったことは、全国国立大学では初めてのことでした。もちろん研究費も旅費も均等配分、教授会の決議事項でした。

信頼していたある教授が「君たちは私のような年齢・立場になる2~30年後、大学はさらに民主的な組織になっているだろうか？従前のような排他的、トップダウン方式に戻らなければ良いのだが・・・」と言われたことを今思い出しては“ドキッ・・・”としています。幾度かの改組・改革を経て、さらに弘前大学が進化していくことを期待しております。



農学生命科学部 教授
原田 竹雄

学生たちとの出会い

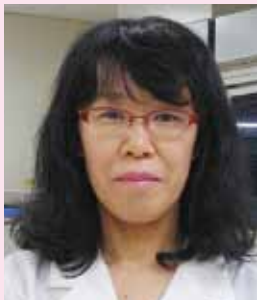
全国各地から入学してきた学生たち、中国からの博士課程への留学生たち計約90名に、指導教員として関わってきました。彼らの人生のとても大切な時期に、大学教員としてまっとうな指導ができていたかを自問しています。

「9時には実験を始めよう、土曜と祭日は基本休みとしない」とガイダンスし、さらに「理系学生は12時間研究室にいるのが望ましい」と檄をとばしたこともありました。うれしいことに、頭脳明晰で勤勉な多くの学生たちが研究の質を一段も二段も押し上げてくれました。週一度は個別面談として実験ノートのコピーを提出してもらい、コミュニケーションの時間としました。彼らが胸襟を開いていたかは判りませんが、この30分間を楽しみにしている学生もいたように思います。面談時には褒めることもこころがけ、「貴方にしかできないことだ、さすがだ!」、「素晴らしい! 世界一の技術だ」と本心からの言葉がありました。

成人して間もない優秀な若人たちと日々過ごすことは、私の意識にアンチエイジングの効用をもたらし、研究へのモチベーションを維持する活力になっていました。大学教員冥利に尽きることです。学生たちとの出会いが続いた私の四半世紀に幕が下りました。彼らは志を抱いてそれぞれの未来へ進んでいきました。その未来は今! 彼らが自身の力量を発揮して、豊かな人生を歩んでいることを嬉しく思っております。



医学部附属病院



薬剤部 副部長
藤田祥子

皆様に感謝

1977年4月に弘前大学医学部附属病院薬剤部の職員として採用され、今年3月に定年退職を迎えることになりました。

勤務当初の正確に調剤することが主体であった薬剤業務は現行では適正な薬物療法を支援することが主体となっております。この間、1992年2病棟2階で初めて服薬指導業務（現行：薬剤管理指導）を開始した際には医師及び看護師の皆様に臨床をご教示頂きました。ISO認証を取得する際にはISO推進室員の先生方に病院の仕組みを教えて頂きました。外来化学療法導入の際には事務の方々に新規業務の立ち上げ方を教えて頂きました。外来新棟への移転の際には将来を見越した薬剤部の設計となるよう新棟移転に携わった皆様にアドバイスを頂きました。そして薬剤部の諸先輩及び現職の皆様に仕事の楽しさを教えて頂きました。

このように多くの方々に場面各々でご指導とご支援を賜り退職を迎えられたことに心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。



病理部主任臨床検査技師
水木恵美子

更に大きな病理部へ

私は当初、中央検査部（現検査部）に勤務し生化学、血清、血液、細菌検査室での検査業務を担当した後、病理検査室に配属になりました。学生時代は上手にパラフィンブロックを薄切することができず、染色すれば手も一緒に染めるという悲惨な実習の経験があったので憂鬱でしたが、いざ病理検査業務を行うと、これが意外に面白い・・・これが私の病理検査との出会いでした。その後検査部から独立し、1994年病理部に配置換えとなりました。

病理部の創設時は部長（併任）、副部長、臨床検査技師2名でスタートしました。事務職員もいなかったもので、自分たちで事務部に行ったり白衣の洗濯物を持って行ったり、本当にゼロからのスタートという感じでした。検査部に所属していた時は部長や技師長、主任、事務の方々がいて、自分は与えられた検査のみをこなしていけばよかったので、改めて検査部での恵まれた環境を知るとともに、少しでも検査部のように大きな部になりたいと思いました。うれしいことに、みんなの努力が報われて、少しずつ大きな病理部となりました。2008年からは細胞診検査が行われるようになり、現在は技師7名、技術補佐員1名になりました。また、2010年には病理診断学講座が創設され、私の想像以上の病理部になりつつあります。病理部での検査も以前より多岐にわたるようになりました。これからは若くて優秀な技師が増えます。黒瀬教授のもと一致団結して、全国に発信できるような病理部になってほしいと願っております。

最後になりましたが、これまで指導して頂いた病理医の先生方や、一緒がんばってくれた技師の方々に心より感謝申し上げます。



医療技術部長・
診療放射線技師長

藤 森 明

診療放射線技師としての回顧

私は昭和51年4月に弘前大学医学部附属病院中央放射線部に入職しました。イギリスのエリザベス女王来日と共にもたらされたCT装置が、弘前大学に設置され、X線フィルムを用いたアナログ機器の時代から大きくデジタル機器の時代に舵が切られる頃でした。私自身は入職後10年ほど一般撮影や血管撮影を中心にX線フィルムを用いた撮影分野を経験し、昭和60年から放射線治療部門で国産2番目となるMLC（マルチリーフコリメーター）を装着したメーカーの直線加速装置を始め、多くのデジタル治療関連機器を取扱いました。その間、放射線治療品質管理士、放射線治療専門技師などの専門資格を取得し放射線治療の進歩と共に歩めたことは幸いでした。平成20年に診療放射線技師長となり平成23年の東日本大震災救援チームに参加したのは貴重な経験でした。平成25年医療技術部長となってからは放射線部門以外の業務に接する機会も増え、多くの職種の方々と一緒に仕事をさせて頂き、人の輪の有難さと心強さを実感致しました。弘前大学の持ち味はこれからも皆様の和で引き継がれて行かれん事を願っています。

最後に、皆さんには時代の流れに翻弄されない真の価値観を仕事に於いても人生に於いても、追い求めて頂きたいと思います。

長い間ありがとうございました。

深謝



看護部 副看護師長

木 村 純 子

定年退職にあたって

学生時代も含め42年間、自分の居場所として当たり前のように本町の職場に昼も夜も通っていたことが、私の人生そのものだったのだなあと、定年を迎える今、改めて気づかされています。

想えば、初めに配属された小児科病棟での骨髄移植を時間も忘れて取り組んだ看護研究。新病棟への移転では、子どもたち全員を無事に移動し終えた時は皆で胸を撫で下ろしました。コンピューター導入では、慣れないキーボードに四苦八苦しましたが、今ではコンピューターのない業務は想像できません。新内科外来への移転では、数十年分のレントゲンの写真袋やカルテの山を数日かけて整理しました。そして、東日本大震災。外来にも患者様がまだ残っていて、大丈夫、大丈夫と声をかけながら巡回しました。思い出深い患者様もいます。いずれも愛おしい思い出ばかりです。皆様との様々な場面が私を支え成長させてくれました。

これまで、大学病院という高度医療機関における医療スタッフの一員であったことは、私の喜びであり、幸運であったと思っています。地域医療の中心である弘前大学病院に対する、自分も含めた地域の大きな期待感は、これまで同様変わることは無いと思います。弘前大学の皆様の今後益々のご健闘をお祈りいたします。本当にありがとうございました。





「新任教員自己紹介」

農学生命科学部



准教授 横山 仁

2014年11月より農学生命科学部に着任した横山と申します。私の研究室では動物の再生現象、とくに両生類の手足（四肢）と皮膚の再生を研究しています。弘前大学に来て自分のキャリアの中で初めて自分のラボを持たせていただき、PIとして研究と教育に打ち込めることに感謝しています。専門である再生研究を軸に地域に貢献する研究・教育を行っていきたくと願っております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

農学生命科学部



准教授 高梨子 文恵

2014年11月から農学生命科学部に赴任しました。専門は農業経済学で、国内やアジア地域の農業を社会経済的な面から研究してきました。弘前大学で津軽地方の農業・農村と関わることができる機会を得たことを大変うれしく思っております。東北地方への赴任は初めてですので、生活面でのことも含めてこれからいろいろ勉強させていただきたいと思っています。これからどうぞよろしくお願いたします。

理工学研究科



助教 島田 照久

2014年12月に理工学研究科に着任いたしました。これまでは、人工衛星の観測や気象シミュレーションを用いて、沿岸域の大気海洋相互作用の研究を行ってきました。特に、夏季に北日本に低温をもたらす「ヤマセ」の研究を進めてきました。地域の気象・気候・海況の理解を深めていくことで、今後は風力等の自然エネルギーの賦存量や利用可能量の推定、日々の予測に貢献していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。

農学生命科学部



助教 山尾 僚

1月1日より農学生命科学部生物学科に着任いたしました山尾僚です。初めての北国で雪と氷柱を日々楽しんでおります。専門は森林生態学で、森林植物を巡る生物間相互作用とそれに対する植物の振る舞い、さらにはそれらが森林の生物群集をどの様に規定しているのか？などについて研究を進めています。学生さんといろいろな話をして、互いに成長していけたらと思っています。今後ともよろしくお願いたします。

教授 伊藤 悦朗

小児科学講座

医学部



写真1 血液グループのメンバーの集合写真

1. はじめに

弘前大学医学部小児科学教室は、青森県における小児医療を担う人材の育成と高度医療の実践を第一の目的にしています。1944年に創立され、これまでに多くの優秀な小児科医を輩出してきました。

弘前大学医学部附属病院は、小児科領域の各種専門家を有する県内唯一の医療機関として、県内外の医療機関から紹介される重篤な患者さんの診療を行っています。弘前大学小児科には、血液・悪性腫瘍、循環器、腎臓・アレルギー・免疫、神経の4つのグループがあり、優秀な専門医が各々の専門診療、研究、教育を担当しています。また、平成22年4月からは、附属病院にNICUが設置され稼働を始めました。臨床においては最高の医療を提供することを目指して教室員一丸となって診療に励んでいます。しかし、その努力にも関わらず、残念ながら難病を抱える子どもたちが全て健康を取り戻せるわけではありません。我々は小児の難病の治療成績を上げるために、基礎研究・臨床研究に積極的に取り組んでいます。

この度、光栄にも平成26年度弘前大学学術特別賞（遠藤賞）を受賞することができました。これまで研究に携わった教室員と学内外の共同研究者に感謝申し上げます。以下に私の専門の小児血液学の診療と研究、特に遠藤賞を受賞しました研究内容について紹介したいと思います。

2. 研究室紹介

小児科学講座の研究の基本理念は、臨床から得られたアイデアに基づいて研究を進展させ、弘前から世界に発信できる独創的な研究を展開することです。「臨床日本一、研究世界一」が目標です。以下に血液グループの研究を紹介します。

血液グループでは、難治性血液疾患の治療のため、造血幹細胞移植を用いた治療研究を積極的に行っています。当科は、東北地方では、最も活発に造血幹細胞移植を行っている施設の1つです。世界に先駆けた新しい移植にも成功しており、2006年には、世界で初めて*NEMO*遺伝子異常による先天性免疫不全症の患者さんに対する造血幹細胞移植に成功しました。小児がんは比較的稀な疾患であるため、より良い治療法を開発するためには、多施設が協力して臨床試験を行う必要があります。私たちは、日本小児白血病リンパ腫研究グループ(JPLSG)に所属し、白血病、悪性リンパ腫などの造血器腫瘍の臨床試験に参加することにより、最先端の治療を行っています。また、神経芽細胞腫、ウィルムス腫瘍、肝芽腫などの固形腫瘍についても、疾患ごとの全国規模の臨床試験に参加し、治療に当たっています。

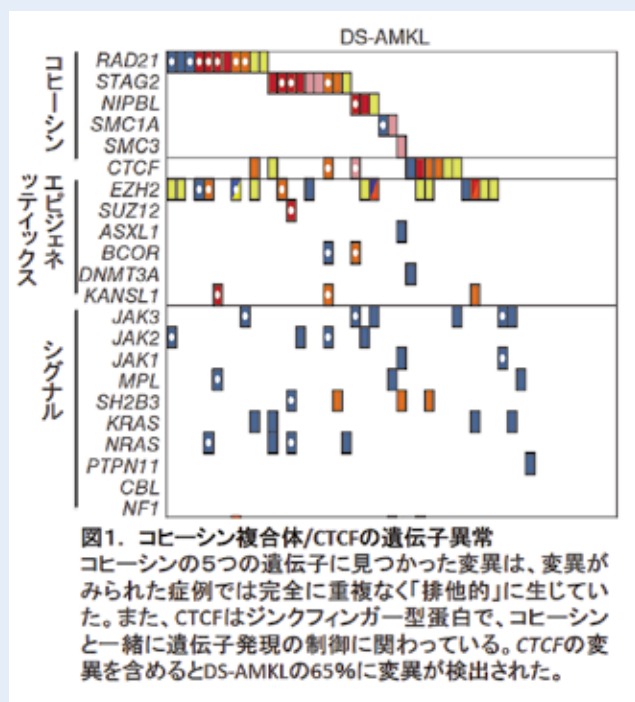
基礎研究としては、ダウン症候群の白血病とダイヤモンド・ブラックファン貧血という遺伝性貧血に焦点を絞って取り組んでいます。この二つの疾患については、日本で発生するほとんど全ての新規症例の検体が、全国から弘前大学に集まってきました。以下に今回の受賞の対象となりました、ダウン症候群の白血病の研究について紹介したいと思います。

3. 研究紹介

21番染色体の過剰で起こるダウン症は最も多い染色体異常症であり、約10%がTAMという一過性白血病を発症します。TAMは自然寛解しますが、約20%の患者さんは生後4年以内に真の白血病である急性巨核球性白血病(DS-AMKL)を発症しま

す。ダウン症では、前白血病状態TAMから真の白血病(DS-AMKL)へ進展するまでの過程を経過観察できますので、白血病発症機構を解明する上で貴重な疾患であると考えられています。これまでに私たちは、赤血球造血のマスタースイッチである転写因子GATA1の遺伝子構造を明らかにし(Ito et al. *Nature* 1993)、DS-AMKLに加え、大部分のTAMにその遺伝子変異が生じていることを発見しました(Xu et al. *Blood* 2003)。TAMとDS-AMKLでは、GATA1変異のためにN末端側の転写活性化ドメインである83アミノ酸を欠いたタンパク質(GATA1s)のみが発現していました。

我々は、*GATA1*変異とGATA1s蛋白の発現量の関係を明らかにするために、転写産物から*GATA1*変異を4種類に分類しました。次に、それぞれのcDNAおよびminigene発現ベクターを作成し、遺伝子導入実験でGATA1s発現量を解析しました。その結果、*GATA1*変異のタイプからGATA1sタンパク発現量を推定できることが明らかになりました。さらに、GATA1sの発現量によりTAMの表現型が異なり、GATA1s low 変異(低発現型変異)をもつTAMは白血病を発症するリスクが有意に高いことを見出しました(Kanezaki et al. *Blood* 2010)。さらに、TAMにおいて、N末端の15あるいは43アミノ酸が内部欠失した新規*GATA1*変異を同定し、巨核球やDS-AMKL細胞の異常増殖を抑制するGATA1の最小領域を同定しました(Toki et al. *Blood* 2013)。また、免疫不全マウスであるNOGマウスにプライマリーのTAM細胞を移植する系(ヒト化マウス移植モデル)を確立し、白血病に進展する過程も観察可能となりました(Saida et al. *Blood* 2013)。我々は、DS-AMKLの症例に*TRIB1*遺伝子の活性化変異を見出しました(Yokoyama et al. *Blood* 2012)。しかし、TAMおよびDS-AMKL発症の分子機構については、ほとんどの症例では*GATA1*変異以外は不明でした。そこで、次世代シーケンサーを用いて、15例のTAM症例と14例のDS-AMKL症例について、ゲノムのうちタンパク質をコードする領域(エクソン)の全塩基配列を徹底的に解読することにより(全エクソンシー



ケンス)、遺伝子変異の網羅的解析を行いました (Yoshida, Toki et al, *Nature Genetics* 2013)。全てのサンプルで確認された *GATA1* 変異を含め、全エクソームシーケンスで同定された1症例あたりのアミノ酸置換を生じる体細胞遺伝子変異数は、TAMでは1.7個でした。一方、DS-AMKLでは5.8個と、TAMより有意に多く変異が認められ、*GATA1* 以外の8個の遺伝子 (*RAD21*, *STAG2*, *NRAS*, *CTCF*, *DCAF7*, *EZH2*, *KANSL1*と*TP53*) に繰り返し変異が認められました。この結果を受けて、41例のTAMと49例のDS-AMKLについて、これらの遺伝子や白血病で高頻度に変異がみられる他の遺伝子群をターゲットシーケンスで詳細に検索しました。その結果、TAMでは*GATA1*以外の遺伝子変異は極めて稀であるが、DS-AMKLではコヒーシン複合体 (*RAD21*, *STAG2*, *NIPBL*, *SMC1A*, *SMC3*) (53%)、CTCF (20%)、*EZH2*などのエピゲノムの制御因子 (45%)、およびRAS/チロシンキナーゼ (以下TK) などのシグナル伝達系分子 (47%) をコードする遺伝子群に高頻度に変異が存在することが明らかになりました。特に、コヒーシン複合体にみられた遺伝子変異は変異がみられた症例では遺

伝子変異は完全に相互排他的であり、DS-AMKLの発症に重要な役割を果たしていることが推定されました (図1)。一方、TAMでは*GATA1*変異以外に繰り返し (高頻度) に認められる遺伝子変異は検出されず、TAMはダウン症候群の特徴である21トリソミーと*GATA1*遺伝子の変異によって起こっている疾患であり、DS-AMKLは、TAMにコヒーシン/*CTCF*および*EZH2*の変異が生じて発症し、TK/*RAS*変異はその後の腫瘍の進展に関与していると推定されました。

今回の成果によって、TAMおよびDS-AMKLの発症メカニズムの解明が大きく前進しました。この研究成果は、ダウン症に限らず、全ての白血病の発症機構の解明と治療法の開発に役立つことが期待されます。

4. おわりに

今回の受賞は、小児科学教室の多くのメンバーの努力の結晶と考えています。特に、土岐力講師、照井君典講師とテニュアトラック教員の金崎理香助教に深謝申し上げます。

平成26年度弘前大学学生表彰を実施



佐藤学長（前列右から6人目）と受賞者ら

本学では、研究活動や社会活動、課外活動で活躍した学生及び学生団体を表彰する学生表彰授与式を、3月3日（火）事務局3階大会議室で行いました。

今回の受賞者は、課外活動等で活躍した4団体、研究活動や社会活動、課外活動で活躍した学生21名で、表彰式には各研究科長・各学部長、指導教員及びサークル顧問の教員も出席し、佐藤学長から学生1人ひとりに表彰状と記念品が贈呈されました。

佐藤学長から、「課外活動や研究活動を通して様々な場面で活躍して本学の名を高めていることを誇りに思う。団体の成果であれ個人の成果であれ、周囲の仲間・教職員のサポートがあって、この日の表彰を迎えているんだと

いうことを理解し、今後もそれぞれの活動に励み、より多くの本学学生の模範となってほしい。」と学生の功績を讃える言葉が贈られました。

受賞者を代表して、教育学部生涯教育課程3年の山形真由佳さんが「私たちの日頃の活動が認められ表彰されるということが非常に嬉しく誇りに思う。学内外での活動が、佐藤学長はじめ、多くの大学関係者の方々に支えられているんだということもあらためて強く感じた。今後も、自分たちが弘前大学の学生であるという誇りと自覚を持って、それぞれの活動に精進していきたい。」と謝辞を述べました。

平成26年度弘前大学学生表彰採択一覧

【団体】

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

No.	団体名(構成員)	
1	医学部スキー部	第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技において、女子総合優勝した。
2	医学部自転車競技部	第57回東日本医科学生総合体育大会自転車競技において、チームタイムトライアル準優勝した。
3	医学部陸上部	第57回東日本医科学生総合体育大会陸上競技において、女子フィールド総合優勝した。
4	医学部バドミントン部	第4回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会（平成26年9月）において、男子団体優勝、女子団体優勝した。 〔補足〕 北日本保健学系学生バドミントン選手権大会とは北海道・東北・新潟に位置する保健学系大学の学生が参加する大会です。

【個人】

研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生等

No.	氏名	学部・学年	受賞理由
1	佐々木花恵	医学部医学科3年	平成26年4月24日～4月26日、広島にて開催された第103回日本病理学会総会において、「早期胃癌におけるリンパ管・血管の局在解析」に関する研究発表を行い、「優秀発表賞並びに発表賞」を受賞した。
2	千葉 大輔	医学研究科3年	弘前市岩木町の住民を対象とした岩木健康増進プロジェクトにおいて、変形性膝関節症に関する疫学調査の研究データ（変形性膝関節症の骨棘と血清ペントシジン及びサイトカインの関連）を第42回日本関節病学会で発表し、優れた発表内容の研究に贈られる「学術集会奨励賞」を受賞した。

No.	氏名	学部・学年	受賞理由
3	菊池 大貴	理工学研究科 博士前期課程1年	平成26年11月10日～14日に東京大学にて開催された国際会議「JGRG24」において「Relativistic Sagmac effect by CS gravity」に関する研究発表を行い、「JGRG Presentation Award (Poster)」を受賞した。
4	及川 祐梨	理工学研究科 博士前期課程2年	理工学部4年次における卒業研究、さらに同大学院博士前期課程を通して含フッ素オリゴマー/無機ナノコンポジット類の開発とその機能解明に関する研究を積極的に、かつ自主的に展開させてきている。その間における特に顕著な研究成果として、全国規模レベルで開催された、2014年色材研究発表会において「フルオロアルキル基含有ビニルトリメトキシランオリゴマー/炭酸マグネシウムナノコンポジットの調製と焼成プロセスにおけるフッ化マグネシウムの生成」に関する口頭発表を行い、優秀講演賞を受賞した。 また、当該学生は自ら行っている研究の総説を執筆しており、種々の分野からそれぞれ高い評価を得ている。
5	斎藤 輝明	農学生命科学研究科2年	食用キノコ「ムキタケ (Sarcomyxa serotina)」には2種類のキノコが混在していることを発見して、両者の学名と和名を整理し、「ムキタケ (Sarcomyxa edulis)」と「オソムキタケ (Sarcomyxa serotina)」の2種に類別した。 これらの結果は、日本菌学会会報 (Vol.55:19-28.2014) に本人を筆頭著者として発表され、東奥日報・陸奥新報・河北新報の三紙に報道された。 本学生の業績は、今後国内外で出版されるキノコ図鑑などに反映される顕著な成果である。
6	加藤 大智	農学生命科学研究科2年	平成26年8月10日～15日にドイツのポツダム市で開催された第8回国際双翅目研究学会 (8th International Congress of Dipterology) において「日本産キマダラヒメガガンボ属の分類学的研究」に関する発表を行い、学生ポスター賞の第2席を受賞した。

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

No.	氏名(団体名)	学部・学年	受賞理由
1	高橋麻里奈	教育学部1年	第65回東北地区大学総合体育大会 円盤投優勝
2	矢口 頌	教育学部2年	第65回東北地区大学総合体育大会 3000m障害走優勝
3	山形真由佳	教育学部3年	第67回東北学生陸上競技対校選手権大会 ハンマー投優勝 第43回東北学生陸上競技選手権大会 ハンマー投優勝
4	木村 綾花	教育学部4年	第36回北日本学生陸上競技対校選手権大会 走幅跳優勝
5	大久保玲美	医学部保健学科2年	第67回東北学生陸上競技対校選手権大会 10000m競歩優勝
6	有益 宏樹	理工学部2年	第43回東北学生陸上競技選手権大会 10000m競歩優勝
7	舘坂 将矢	教育学部1年	東北学生柔道体重別選手権大会 60kg級 優勝 全日本ジュニア柔道体重別選手権東北予選会 60kg級 優勝
8	板矢 一希	医学部保健学科2年	第4回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 男子シングルス優勝
9	工藤 甚子	医学部医学科1年	第57回東日本医科学生総合体育大会 自転車競技女子個人タイムトライアル準優勝
10	光岡明日香	医学部医学科1年	第57回東日本医科学生総合体育大会陸上競技 女子走幅跳準優勝
11	伊藤 真子	医学部医学科3年	第57回東日本医科学生総合体育大会陸上競技 女子砲丸投準優勝
12	濱谷 智子	医学部医学科3年	第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技 女子複合第二位
13	高橋 茜	医学部医学科3年	第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技 スーパー大回転女子並びに女子回転 双方準優勝
14	宇佐美真太郎	医学部医学科4年	第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技 男子回転優勝
15	舘田 優	教育学研究科2年	国際的規模の公募展「AOMORI PRINTトリエンナーレ」においてタイトル「二重肖像」を出品し入賞した。当該展覧会は革新的現代アートの創造を目指す主旨の下、国内外に呼びかけ国際版画トリエンナーレ公募展として企画されたものである。 大賞に次ぐ部門賞5点のうちの「みちのく銀行賞」の栄冠を勝ち取った。

弘前大学「第10回学生相談を考える会」を開催



平成27年2月16日(月)、学生相談に携わる学内外の教職員を対象にした「第10回学生相談を考える会」を開催しました。同会は多様化・複雑化する学生相談に適切に対応し、学生への支援体制を充実させようと平成20年度から開催しており、今回で10回目の開催となります。近隣の秋田大学外、他大学等も含め約40人が参加しました。

今回は、平成27年9月末から弘前大学相談員として活動していただいている土岐智氏から「障害学生支援コーディネーターからの報告～修学等に困難のある学生への支援の在り方を考える～」と題した情報提供

がありました。

コミュニケーションの困難さや修学上の問題を抱える学生に対して、コミュニケーションの困難さをどう本人に自覚してもらうかなどといった、今後大学として取り組む必要のある課題などについて、保健管理センター田名場准教授、同高橋講師と参加者を交え、障害学生（発達障害学生を含む）への支援において、いろいろな角度からの意見を交わす貴重な機会となりました。

弘前大学COCシンポジウムを開催

本学では3月3日(火)、「平成26年度弘前大学COCシンポジウム」を弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大八甲田ホールで開催しました。

このシンポジウムは、平成26年度に本学が採択された文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に関連して、「地域の視点から教育改革を考える」をテーマとして開催され、教職員や学生、自治体関係者ら約100名が参加しました。

シンポジウムでは、佐藤学長による開会挨拶の後、山形大学理事・副学長の安田弘法氏による「地域の大学とその教育について」と題した基調講演や、「ユニバーサルな視点を持って地域課題解決に取り組む人材とは」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、講師の安田氏のほか、伊藤教育担当理事、NPO法人理事長の米田大吉氏、人文学部4年の田中雄大さんがパネリストを務め、参加者との間で活発に意見が交わされました。



編集後記

「立春」がすぎているにもかかわらず、吹雪きがつづいているいまこの頃、大学入試などで教職員は忙しい日々を送っている時期であります。新年度へのわくわくする気持ちは学生のみなさんと変わらず、弘前の百花繚乱の春が待ち遠しい時でもあろう。暖かくて前向きなメッセージ満載の特集号を読んで、元気で、新しい収穫の多い新学年になるように、仕事と勉強をして行こうと心に決めている人も多いのではなかろうか。

(Y)

弘前大学生協で行っている環境活動

弘前大学生協では環境マネジメントシステム（KES）を導入し、事業活動や組合員活動の環境負荷軽減を推進しています。

販売している内製弁当の容器のリサイクルを初め、レジ袋使用枚数の削減、割りばしやペットボトルのふたの回収などを行っています。また、生協学生委員会が中心となり、青森県生協連で行っている植樹活動への参加や、学内の花壇の整備など身近なところの環境活動にも関わっています。



↑ 学内の花壇整備
植樹活動（苗を植える穴を掘る）→



●平成24年～26年度の取組比較 (テポジット弁当容器)

	弁当容器の回収率 (%)
平成24年度	84.9%
平成25年度	69.3%
平成26年度	75.0%
回収増加率	+5.7

※研究室などで溜めている容器があれば、ぜひ生協店舗へお持ちください。

新入生サポートセンターの 食堂内営業について

■新入生サポートセンター

弘前大学生協では、入学してくる新入生とその親御さんがスムーズに新生活や勉学準備が出来るよう、4月初旬まで食堂ホール内に新入生サポートセンターを開設しています。

新入生サポートセンターでは、弘前大学の学生たちがアドバイザーとなり、新入生、保護者様のサポートに努めています。

サポートセンターの営業期間中、食堂をご利用される方々には、席の減少などでご不便をおかけいたしますが、何卒ご了承ください。

◆ 新入生サポートセンター営業期間 ◆
2月12日（木）～ 16日（月）
3月 6日（金）～4月 9日（木）
＜サポートセンターへのお問い合わせ＞
フリーダイヤル 0120-154-163

弘前大学ご卒業を お慶び申し上げます

■弘前大学オリジナル 日本酒「弘前大学」

平成26年度の金木農場産米を使用し醸造された日本酒「弘前大学」の新酒が2月27日に発売されました。（720ml 2,143円）

口に含むとふくよかな香りがし、飲み口はすっきりと柔らかく、日本酒を初めて飲む方でも飲みやすいお酒です。

これからのご活躍が期待される卒業生の皆様にも、いろいろな場面でご愛飲いただければ幸いです。



●日本酒「弘前大学」は下記店舗でお求めいただけます。
弘大生協サリジェ tel 0172-34-4622

弘前大学生協生活協同組合（0172-34-4806）



弘前大学 学園だより
Vol.183



HIROSAKI
UNIVERSITY

弘前大学 学園だより Vol.183

2015年3月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。

e-mail: jm3113@hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課

国立大学法人 弘前大学「学園だより」編集委員会

委員長 黄 孝春 (教育委員会)
委員 楊 天曦 (人文学部)
塚本 悦雄 (教育学部)
松谷 秀哉 (医学研究科)
高見 彰淑 (保健学研究科)
小菅 正裕 (理工学研究科)
栗田 大輔 (農学生命科学部)
澤田 祐子 (学生課)
粕谷 常好 (学生課)
印刷：コロニー印刷